【事業実績】

本プロジェクトでは、① 港区の多様な地域文化資源を活用し、様々なコミュニティとともに文化プログラムを実践することにより、異なるコミュニティ間の分断の拡大を防ぎ、「包摂する社会」の実現に寄与する ②多様な文化資源に基づく地域の活動を可視化し、その担い手と活動をつなぐコミュニティを形成する ③ 文化の継承と時代に即した更新、社会への再接続を担うミュージアムの機能を強化するモデルを提示する ことを目的とし活動を行っている。

1. 包摂的な文化体験の創出

世代、デジタル・リテラシー、障がい、ライフステージ、価値観などが異なるコミュニティのメンバーが、地域文化資源を活用した文化体験にともに参加し、体験を共有することを通じて、コミュニティのゆるやかな接続を図るためのプログラムを 3 種 5 回実施した。

・「インクルーシヴな寺院体験について考えるワーキング・グループ」(参加者 8 名)

泉岳寺と連携し、寺院の僧侶、目の見えない方、目の見えない方とともに活動している実践者、自治体の文化担当者、ミュージアム関係者が集ったワーキング・グループ

・「目の見える人と見えない人:ぶらぶら&まっすぐモードで体験する増上寺の境内散歩」(参加者:8 名)

視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップの協力を得て、増上寺の広大な境内において、包摂的な体験を作りだすためのワークショップを企画、実施した。**増上寺の案内パンフレットの点訳(500 部)**にも取り組んだ。

・トークセッション「地域の文化資源を活用したインクルーシヴ・ワークショップの実践」(参加者:32 名)

プロジェクトでのインクルーシヴを巡る実践を振り返り成果を検証するトークセッション。**記録映像(1 本)**を制作。

・「コレクティヴ・メモリー3 技術編:地域の文化と記憶を映像資料で読み解くラーニング・ワークショップ」(参加者:34 名)

新旧コミュニティの融合を図るプログラム実践の試み。個人を通じた地域の記録を発掘し、いかに保存するかに焦点を当てたラーニング・ワークショップ。

効果 寺院での WG・WS は、多様な特性を持つ個人に寄り添い、包摂的な体験を実現するアプローチについて検討する機会となった。トーク・セッションは、日々の活動において、不十分であっても「今回できること」を実践することの重要性を共有する場となった。コレクティヴ・メモリーは、若い世代がアナログ媒体資料に出会い、それを通じて世代の異なる人々やその知識と繋がる機会となった。

泉岳寺でのワーキング・グループ

増上寺の境内散歩

インクルーシヴ・トークセッション

コレクティヴ・メモリー3

修復家の手とまなざし WS

参加者からの声 この運動をどう広げていくか考えていきたい／参加者が学生から社会人、美術館関係者と色々の方がいて良かった／他の方の考えを聞く事でそういう捉え方をするのかと、気づきを得ることができた／世代的に経験していない記録メディアを見たり触ったりすることができて満足／港区にさまざまな地域文化資源があり、それらが活用されていると確認できた／多角的な対話の中から見えてくるものがあった

2. 多様性を見出し、受け入れる:「オブジェクト・ベースト・ラーニング」ワークショップの実施とモデル構築

「オブジェクト・ベースト・ラーニング(OBL)」は、学び手が文化財に直接に出会い、観察をすることによって、文化財と自らの繋がりを深めるとともに、文化財を通じた他者との対話を促す学習方法である。この OBL を、地域文化資源に展開し、「内省」と「対話」を通じて多様な文化が共生する社会の実現に寄与することを目指して、**2 種 3 回**のプログラムを開催した。

・「地域文化資源を対象とした『オブジェクト・ベースト・ラーニング』モデル化のための WG」（参加者：6 名）
・トーク「駒井哲郎を語る家族のまなざし」（参加者：25 名）、ワークショップ「修復家の手とまなざし：オブジェクト・ベースト・ラーニングワークショップ」（参加者：9 名）
OBL の手法を用いて鑑賞体験を深めるとともに、鑑賞体験の多様性を伝えるプログラム。記録映像（1 本）を制作。

効果　WG の中で試行したインクルーシヴ・OBL のワークショップは、日本で初めての試みであり、ミュージアムにおける包摂的活動という文脈においても、また OBL の文脈においても、新しい可能性を開くと想定される。修復家とのワークショップでは、キュレーターやエデュケーターだけではなく、ミュージアムや作品に関わる多様なメンバーが OBL の実践に携わることで、多様な作品の鑑賞体験を生み出すことができるという手応えを得た。

参加者からの声　専門的な話が多かった。広く一般に門戸を広げるならもう少し説明の資料が欲しい／最初は難しそうなことをするなと思ったけれども、参加してみたらとっつきやすかった／情報を引き出すのになれていない人が楽しめるのか、ちょっと疑問／話すことで新しく気づくことがある／作品世界が大いに広がった

3. 地域の文化資源を可視化し、相互につなぐラーニング・ワークショップの開催

様々な領域の地域文化資源を可視化し文化資源をめぐる活動や担い手をつなぐこと、また活動への参加者同士が交流することを目指して、異なる領域に属する文化資源を組み合わせたラーニング・ワークショップを 3 種 5 回開催した。テーマは、寺院文化（江戸・歴史／庭園）、現代アート（現代・美術）、そしてモダニスム建築（近代・建築）とした。
・「寺院に江戸の庭園を訪ねる：寺院の文化と現代における活動を学ぶワークショップ」（参加者：15 名）
江戸時代初期から三田寺町に所在する浄土宗寺院、大松寺の見学会。記録映像（1 本）を制作した。
・ピア・ラーニング・ワークショップ「大学生と一緒に、見えない『都市のいきもの』の図鑑をつくろう」（参加者：18 名）
・「建築公開日（建築プロムナード）」（参加者：859 名）、ガイドツアー「普連土学園 × 慶應義塾大学」（参加者：14 名）、レクチャー「学校建築に求めた大江宏のモダニズム ── 法政大学から普連土学園まで」（参加者：31 名）
ワークショップ参加者を越えた体験の共有とモデルの共有化を目的として、成果冊子（250 部）を作成した。

大松寺見学会

ピアラーニングワークショップ

建築ガイドツアー

効果　寺院 WS は、参加者にとって、一般非公開の寺院やその文化財を見学する貴重な機会となっただけではなく、寺院を守る活動へ自分がどのように貢献するか、という視点を喚起するものとなった。ピア・ラーニング・ワークショップは、大学生・中学生の双方にとってアートが社会に向き合う姿勢やプロセスの一端を共有する学びのプログラムとなった。数多くの参加者を得た建築プログラムは、建築の価値を伝えるだけではなく、本プロジェクトの活動を広く知らせる役割も果たすイベントとなった。

参加者からの声　文化財を地域の人々で一緒に育てて行くことができないかなと感じた／生活の場としての建築の意味を考えた／みんなで色々な意見を出し合っていろんな作品を作りましたが個人個人独創的な作品がありその作品にちゃんとした意味があったりしてとても面白かった／今回のワークショップの形態からか、単に自分たちが企画する側に落ち着かず参加者側としても共にワークショップを作っている感覚があった

4. プロジェクトの運営・モデル化

プロジェクト運営のための実行委員会会議を 1 回（参加者：13 名）開催し、プロジェクトの活動内容、とくに推進の方法や企画内容、予算、各連携機関の分担について確認した。また、プロジェクトの活動に有効な評価のあり方についての検討会を 1 回（参加者：7 名）開催した。加えてプロジェクトの成果とモデルを広く共有するため、全体報告書（300 部）を作成しウェブサイトでも公開を行った。